



# あなたの相棒

人間誰しも、大切な人・物・場所があるはず…。  
府立生野高校写真部と一緒に、そんな誰かのかけがえのない「相棒」を紹介します。第11回目は、  
新堂の「たつみミシン」を営む巽康至さんです。

ミシンと共に生きる

アメリカンな雰囲気醸し出す外壁の文字。中に入ると100台を軽く超えるアンティークなミシンが所せましと並ぶ。中央には人とほぼ変わらない高さの大きなミシンが置かれていた。

松原市に店を出して38年。店主の巽さんは二代目だ。元々は普通のミシン屋さんとして営業していたが、10年程前から古い工業用のミシンを中心に扱うようになってきた。中には100年近く前に作られたミシンもある。驚くのは、店に置いてあるミシンの全てが今も使える状態にメンテナンスされているということ。

「今のミシンは多機能で、一台で何役もこなすけど、耐久性は昔のミシンにはかなわない。昔のはほとんどが鉄製で頑丈。ちゃんと修理してやったらずっと使えるし、モノとしての確かさがある」と教えてくれた。これだけ年代物のミシンが置いてある店は何つたにないだろう。なんと、朝の連続ドラマ小説「カーネーション」に貸し出していたこともあるそうだ。

「うちに来るお客さんは、昔ながらのやり方で何かを作ってみたいとい

う人が多い。完成したのを買うんやなく、モノづくりを楽しみたいっていう人。そんな人の夢を実現させるお手伝いができたらええなと思う」こう笑う巽さんは、ミシンという道具に誰よりも惚れ込んでいるようだ。

「相棒」を尋ねると「まあ、この人しかおらん！」と、傍にいたIさんを笑顔で呼んだ。二人の出会いは三年前。最初はお客さんとして店を訪れたらしい。元々モノづくりが好きだったIさんは、すぐに「たつみミシン」の虜になり、気付くとお店を手伝うことになった。

「昔のミシンは機能がシンプルで、そんなに色んなことができるわけではない。でも逆に、一つのものしか作られへんかったら、それで何かええモノ作つたらって思えるねん」と相棒のIさんは語った。普段は巽さんがミシンの修理や売買を行い、Iさんはモノづくりの職人として、巽さんとは別の視線で色んな提案をしているそうだ。二人はお互いに欠かせない存在なのだろうと感じた。「たつみミシン」

は、優しき、心地よさ、そして温か

さがたくさん詰まった素敵なミシン屋さんだった。

文 野口花梨(二年)



## 生野高校写真部 × 広報まつばら

今回広報まつばらに載らなかった写真部が撮影した写真は市ホームページで見ることが出来ます。

